

Eureka XI

六年制通信 No.11 令和5年6月23日(金)号

理想の学校

藤井聡太新名人の誕生は6月1日、我ら聡太ファンには忘れられない日となりました。最年少名人の誕生ですからね。谷川十七世名人が21歳で名人位についたとき、私はまだ学生でした。同世代の谷川さんの活躍に心躍ったのを覚えています。さすがの藤井聡太も天才谷川の記録だけは抜けないだろうと思う向きもあったようですが、まるで既定路線であるかのように抜いていきましたね。怖いくらいの強さです。

藤井名人が小学生の頃、将棋のエピソードは山のようにあるのですが、学校で先生にこんなことを言ったらいいのですね。「どうして5分でわかることを50分もかけて授業するのですか、45分は無駄ではないですか」と。その時の先生が、君は5分でわかるかもしれないがそうじゃない子もいるからねと教えると、聡太少年は納得したということです。実はこれ、なかなか考えさせられるエピソードでね。学校教育の本質的欠陥が示されているように思います。ちょっと難しいかもしれませんが、日本国憲法第二十六条第一項には「すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と書かれています。この条文は何の不思議もないように思うかもしれませんが、小中高のどの学校でも恐らく守られてはいないでしょう。「その能力に応じて」が実践できないのです。100人生徒がいるとして、全く同じ能力を持った生徒はいません。個人によって能力は違います。その能力に応じて、ということであれば究極はマンツーマンの教育以外ありません。そして、誰もがそんなことは不可能だと思っているわけです。これも少し難しいかもしれませんが、特に現代は「個性の尊重」が声高に叫ばれています。「みんな違ってみんな良い」という言葉もよく聞きます。しかし、個性の尊重と言いながら、本来バラバラの個性(能力)を持つ生徒たちに同じことを同じ空間で同じペースで勉強させ、そのペースについていけなくなると「落ちこぼれ」のレッテルを貼っているわけです。そして「落ちこぼれ」をなくすこと、これが教育現場では一番大切だと教育行政は言うのです。

しかしながら、その逆のパターン、つまり50分の授業を5分でわかる生徒に対しては何の手当てもしないのが普通です。「わかる」「できる」、それならその段階でよし、その先に進む必要なし、これが学校教育の本質的な欠陥だと私は思います。出る杭は打たれると言いますが、打たれることはないにしても放って置かれるわけです。中学校で習う数学を中学1年生の段階で修得する能力を持つ生徒は多くいるはずです。しかし学校はその生徒に高校で習う数学を教えるてはいないでしょう。「その能力に応じて」教育を受ける権利は行使されていないのです。飛び級という制度は日本人には馴染ま

ないと言われますが、教科ごとの飛び級があってもいいと思いますね。「必修科目」という考え方が学年で設定されているのも本当は弊害ですね。ただ、学校の担う役割が知育に特化しているわけではないので、わかっているにもかかわらずなかなか教育改革はできないのですね、きっと。そうであるなら余計に、先生方にはせめて、理解の先行している生徒に対し $+\alpha$ の働きかけをしてやってほしいと思います。

さて、これは複数の大学教授から聞いた話ですが、今の日本で最も理想の教育が行われている学校は自動車学校ではないかと。卒業生相当の学力がついているかという観点から言えば、小学校卒業生で七割、中学校だと五割、高校で三割しかついていないと言われているそうなのです。しかし自動車学校では卒業時にはそれにふさわしい技能が身についています。理由は簡単。まず学校に通う目的がはっきりしていること。他人と協力する必要がないこと。教わる側の意欲が非常に高いということ。完全なオーダーメイドの学習、つまり個人が理解し実践できるまで何回も学習ができる（有料ですけど）。また、学習段階が細かく規定されていて一つ一つクリアしていかないと次に進めない。さてさて、学校教育に生かせるヒントがあるでしょうかね。

今週のおすすめ

・内村鑑三 『後世への最大遺物・デンマルク国の話』 （岩波文庫）

別に内村さんに凝っているわけではないのですが…。「後世への最大遺物」は講演ですから読みやすいかと思ってね。遺物とは残すものという意味です。しかし本当に頭のいい人ですね、内村さんは。読んでみると教養の深さに呆れます。この本は、要するに死ぬまでに何を残しておくべきか、という問題を扱っているのですが、お金、事業、思想と進んでいって結論は自分が正しく生きることをもって後世への最も素晴らしい遺物となるとしています。何だそんなことかと思うかもね。でも、読んでみると説得力のある講演ですから、なるほどと思ってしまいます。

この本を推薦するのは、内村さんの考え方を知ってほしいからではなくて、文中にあるハーシェル（1792-1871）の言葉を読んでほしいからです。ハーシェルはイギリスの天文学者。彼は学生の時に親友と誓いを立てるのですね。その言葉が「わが愛する友よ、われわれが死ぬときには、われわれが生まれたときより世の中を少しなりとも善くして往こうではないか」なのです。私はこんなことを考えたこともなかった。しかも自分がどっぷりと浸かっている教育現場も、どう考えても昔より善くなっているわけではない。むしろ悪くなっていると思えな。子どもはどんどん甘え、幼児化し、弱くなり、嫌なことは何もかも他人のせいにし、一方で子どものような大人も増え、つまり人間は重層的であるということも認められず、自分の子どもの言うことだけを信じ、結局子どもの成長の妨げとなる大人が増え、社会は義務と権利のバランスを欠いている、そんな風に思ってみても、だからといって私はハーシェルのように考えられなかった。これでもかなり時代に抗っているつもりですけどね。若い君たちはハーシェルの言葉をどう聞くのだろう。そう思ったから推薦図書にしたわけです。

BGMは 森田童子 の ぼくたちの失敗 でした…。